

感動は普遍の中に

ブロッコリーの木、クロワッサンの雲、ホチキスの針のビル……。だれもがよく知るものを別のものへと置き換える「見立て」の作品で、人気のミニチュア写真家・見立て作家の田中達也さん。毎日作品を発表しているSNSには、共感と驚きの声が世界中から届き続けている。



「ミニチュアライフ」(写真上)、「ハプアライズトリップ」(右)、「E.V.E.マック」(左)

共感の中にある「気づかなかった」を探して

ミニチュア写真家・見立て作家の田中達也さんが運営するInstagramのアカウントは、フォロワーの約7割が海外のユーザーだ。また、親子で楽しんでる人も多い。まさに国境も世代も超えて支持されているわけだが、それには理由がある。

「世界の多くの人が共通して○○だと認識できる、日常でごくありふれたものを使い、見たことがありそうな風景や、何をしているかが一目でわかるシーンを描くようにしています」

ブロッコリーを木や森に見立てた作品群は、その最たるものだろう。同じ野菜でも、例えばキュウリは形もサイズも土地によって異なるが、ブロッコリーは、世界のどこに行っても大体同じ。ハサミや定規などの文具類、フォークやナイフといった食器類も同様だ。そうした世界共通のものを使い、自然や衣食住、映画のワンシーンなど、共感をしやすいテーマを表現する。

「『ずっと見ているのに気づかなかった！』そうきたか」と。見る人たちに驚いたり悔しがったりして楽しんでるもの、それが好きなんです。だから、おなじみのものを何に見立てるかが勝負です」

アイデアの種は、広く行き渡っているもの、つまり普遍の中にこそあると、

「見立て」が「mitate」になるとき

そもそも「見立て」は日本文化の伝統的な技法だ。そのルーツは『古事記』までさかのぼれるとも言われる。砂や小石で水の流れを表した枯山水の庭や、食べものでは金塊や小判の代わりの栗きんとん、日の出をイメージした紅白かまぼこといったお節料理にも用いられている。

海外でも、たとえばクロワッサンは17世紀、ヨーロッパに攻め入ったオスマントルコ軍の象徴である三日月をかたどったという説があるなど、似た例はある。しかし、日本語の「見立て」にぴったりに当てはまる言葉が見当たらないと、田中さんは言う。

「見立てとは、単に何かを何かに置き

常に見立ての視点で日常の風景を眺め、スーパーマーケットやホームセンターに通い、海外を訪れば日本や他の国との共通点を探す。そうして集めたものの中から、これはというものを1モチーフ1アイデアに落とし込んで作品に仕上げる。

とはいえ、すべての作品が支持されるとは限らないという。「シンプルに見立てを成立させたほうが共感されやすいです。見る人の想像力が入り込む余地があるほうがいいのかもしれない」

作品の内容とともに驚かされるのは、2011年から一日も欠かさず作品を投稿し続けていることだろう。数にして5000件余り。常人ならとくにアイデアが枯渇しそうなものだが、「アイデアが尽きることはない」と田中さんは言う。

「アイデアが枯渇しないのは、アイデアを出し続けているからこそです。ストックがあるからとアイデアを出すことを止めてしまえば、そこで尽きてしまいます。まずは惜しみなく出し切る。一度頭の中を空っぽにして自分を追い込むことで、新しいアイデアが生まれてきます。料理人が既存の食材を組み合わせて新しい料理を創り続けるように、これまで使ったモチーフやアイデアを組み合わせることもあります。毎日続けることで、これは見立てに使えるかも、といった勘がさらに働くようになっていくことも大きいです」

換えるだけでなく、『柔軟な発想や工夫で、似ているもの同士をつなぎ合わせて関連付け、違う意味合いにする』ことだと思っんです。英語ではlook like、similarなど『似ている』という言葉を充てることが多いのですが、それでは見立ての深い意味までは表せないと感じています」

「見立て」は「見立て」という言葉でしか表せないのではないか。ならば、haikuやsushi、emojiのように、ローマ字表記でmitateとしてみようかもしれない。

「海外でmitateが当たり前のように使われるようになって、辞書に載ったら面白いですよ。インターネットでmitateという言葉を探ると、その意味とともに僕の名前と作品が出てくる、それがいまの目標です」

日本の文化がまた一つ、世界標準になろうとしている。



「ホットキッチン」



「スマートでスムーズな運行」



田中さんは、木を表現するなら、丸や三角の形状のものに棒を組み合わせる、といったように、よく目にするものを単純化し、そこから当てはまるものを考える。また、同じものが並んでいるものも見立てやすいという。

「スマートフォンのアラーム画面は、丸いボタンがたくさん並んでいますよね。日常の中で丸がたくさん並んだ状況は何があるだろうと考え、飛行機の窓を導き出しました」(写真・6ページ右下)。小道具の形もポイント。サングラスをパソコンに見立てた作品(写真・5ページ左下)は、四角いサングラスだからこそ成り立つ。さらに、見立てるモチーフと人形のサイズ感も大切にしている。「ピタッとハマるときは、人形を置いた瞬間、うわっと毛穴が開くような感覚になります」

題材や小道具はどれも見慣れたものだけに、一つや二つならだれでも思いつきそうに見える。しかし、そこに独自性があるからこそ、世界中で支持されている。では、田中さんの独自性とは、

「一人の人間が普遍とは何かを考え、表現し続ける。その積み重ねこそが、僕の独自性なのかもしれません」



WEB版では本誌未掲載エピソードもご覧いただけます。



ミニチュア写真家・見立て作家

田中 達也(たなか たつや)

1981年熊本県生まれ。Instagramのフォロワー数360万人以上(2022年8月現在)。作品展では、どの方向からでも写真が撮れる円形アクリルケースなど独自の仕掛けや工夫が好評。2022年6月、初の絵本『くみたて』(福音館書店)発売。

WEBサイト「MINIATURE CALENDAR」では発表作品をカレンダー形式で閲覧できる。

<https://miniature-calendar.com/>